

# 『おねーさんの耳はロボの耳』 第二話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元にしています。

これまでのあらすじ

来栖川本社の意向によって、感情制御システムの改造が行われることになったHMX13型セリオ。その改造を終えて、浩之とマルチが平和に暮らす家に何の前触れもなくやって来たセリオは何と「セリオおねーさん」として、強引に彼らと同居することを告げた。

そして、呆然とする浩之の前には、セリオの荷物が鎮座しているのだった。

3. 仲良くしましよ

浩之は相変わらず固まったままだった。

到底一人では運ぶことは出来そうにないくらいの荷物が、自分の目の前にあるのだから無理もない。

(…しかし、セリオはこれをどうやって運んで来たんだ?)

ようやくまともな思考が出来るようになって、それはやがて、

(…ここまで運んで来た手段があるんだから、俺がやらなくてもいいんじゃないか、もしかして…)

と言う方向にまとまって行った。同時に、セリオに対する怒りのようなものも込み上げてきた。

(そ、そうだぜ：何で俺がロボットの荷物を運ばなきゃいけないんだよ?)

こうなってくると、もはや取る手段は一つだけ。浩之は踵を返して、玄関を上がつて、そのまま居間へと向かった。

その頃の居間ではセリオとマルチが、それはそれは楽しそうに話をしていた。

二人ともソファに腰を下ろし、何気ない世間話に花が咲くと言う感じである。

ただし、話の展開はどうもセリオがリードしてるようだった。

「ところで、マルチは浩之さんと一緒に寝てるの?」

「えっ! そ、それは…」

またセリオに話を振られる形で、質問を受けるマルチ。聞かれた内容が内容だけに答えに詰まると、セリオがマルチの二の腕をつんとつつきながら、

「隠さなくたっていいじゃないの。あなたとわたしの仲なんだから」

と急かす。マルチもそれに負けずに、

「ど、どうしてそんなことを聞くんですか?」

と切返したものの、セリオはそんなことも構わずにさらりと答える。

「んー、もしマルチと一緒に寝てないんだったら、わたしが添い寝してあげようかなって思ってる」

「…誰とですか?」

マルチが質問をすると、セリオは少し考えたような素振りをしてから言い出す。

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

「もちろん、それは…あら？」

と、そこに浩之が姿を見せ、セリオはすぐに浩之の方を見て、にっこりと笑いながら、「浩之さん、荷物は運んでくれましたか？」

と声をかけた。だが、浩之の反応は怒りとも呆れともとれる表情が物語っていた。

「あ、あのなあ…。あんな大荷物をどうやって運べってんだよ…。だいいち、セリオはここにどうやって運んだんだよ？」

「それはもちろん、研究所の車で持ってきたのよ」

「な……………」

何でそれをそのまま帰したんだ…と、浩之が問い詰めようとする前に、セリオがそれをささげぎった。

「でも、呼んでもすぐに出てくれなかったから、止めて待たせるのはよくないなと思って、荷物だけおろしてもらったの」

「う……………」

そう言われては、浩之は何も言い返せない。だが、セリオの攻撃は続いた。

「わたしとしても外に置きたくはなかったけど、しょーがないわね」

「セリオおねーさん、ごめんさい…」

瞳をうるうるさせながら、謝るマルチ。

「マルチはいいのよ、ちゃんと出ようとしてたんだから」

「う……………」

何も言えずに一層立場の悪くなる浩之。

そして、とどめにセリオが、浩之の方に向き直して、これ以上はないほどの優しそうな笑みを浮かべて、ひとこと。

「それじゃ、お願いね、浩之さん」

言葉の最後にはハートマークが付きそうなくらい、それは絶妙な抑揚と間を持っていた。そして、それに抗うすべなど、浩之にあらうはずがない。

浩之はがつくりと肩を落として、再び玄関へと向かった。セリオの荷物を運ぶために。

「あ、わたしも手伝います」

とマルチもそれに続いて出て行く。その姿を見てセリオは、

「やれやれ、しょうがないわね」

と言いながら、自分もそれに続くのだった。

結局は三人がかりでセリオの荷物を二階の空いてる部屋に運び入れることになり、それを一通り終えてようやく浩之がひとごちをつく。

「ふううう…」

居間のソファにどかっと腰を下ろして、大きなため息をひとつ。それを見てマルチが申し訳なきように、

「すみません、全然お役に立てなくて…」  
と謝る。

「なあに、マルチはよくやってくれたよ」

浩之はそんなマルチの頭を撫でて、慰めるのだった。それに対して、セリオは至って変わりないと言うか、特に疲れた様子ではない。だからと言ってセリオが何もしなかったわ

けでもないのだが。

「…わたしだってサボってたわけじゃないわ」

「な、何だセリオ。別にお前がサボってたなんて言っていないじゃないか」

「じゃあ、同じようにして」

「へ？」

一瞬セリオの言った意味が理解できなかったが、要するに「マルチと同じようにしてくれ」と言ってるのだと気づくと、妙にセリオが可愛く思えたりするから不思議なものだ。  
だが、

「ははは、分かったよ」

と笑いながら浩之が手を出そうとすると、セリオはその手を取って、

「どうせなら、手よりもこっちの方がいいな」

と言いながら、浩之の指先を自分の唇にそっと当てる。

「い…」

途端に浩之の表情が、さっきまでの優しそうなものから苦虫をかみつぶしたようなもの  
に変わって行った。頭を撫でられて、ぼーっとしていたマルチもそれに気づき、

「…どうしたんですか、浩之さん」

と尋ねてくる。どうやら、セリオとの会話そのものをまるで聞いてなかったらしい。

「い、いや、何でもない…。ははは……」

と、ひとまず苦しい笑いで答えておき、セリオの方を見やると、

「そうそう、マルチ。何でもないから、気にしなくていいのよ」と笑っていた。

この時浩之は改めて感じたのだ。これからの生活への漠然とした不安を…。

「いきなりで少し驚いたかも知れないけど、仲良くしましょ」

にっこりと微笑むセリオ。

「はい、わたしもセリオねーさんと一緒に暮らせるなんて嬉しくてたまりません。ねえ、

浩之さん」

はしゃぐマルチ。

「あははは…、そうだねえ」

作り笑いを浮かべる浩之。

「何かいつもと違うみたいですけど、大丈夫ですか、浩之さん？」

「あはははははははははは……」

心配そうに浩之の顔を覗き込むマルチにも答えずに、ただただ乾いた笑いを続ける浩之だった。

4. 究極のごほんと言うもの

それは浩之の一言から始まった。

「なあ、セリオって確か衛星リンクでどんな料理のデータも取れるんだよね？」

「ぼちぼち夕食の支度でもと言う時間になった頃である。」

「ええ、それは出来るけど。何かご希望でも？」

「どうせなら、豪勢に何か作ってもらいたいところだけだな」

しかし、マルチもセリオも、浩之の言葉に苦笑しながら答える。

「あの材料が殆どないんですけど…」

「めぼしい材料がないから、何をやっても変わらないと思うけど」

二人に言われて、ちよつとだけ浩之は意地を張ってみたくなった。

「う…。でも、そこを何とかするのがメイドロボとしての腕の見せ所だろ？」

「はあ…。どうしましょうか、セリオおねーさん…」

愛すべきご主人様にそうまで言われて困り果てたマルチがセリオに言うと、セリオは不敵な笑いを浮かべながら答えた。

「分かったわ。それじゃ、データベース検索をするから、ちよつと待っていただけるかしら？」

その笑みにどこかしら寒気を感じた浩之が怪訝そうに尋ねる。

「何をすつてんだ？」

「だから、データベース検索よ。ここから衛星にリンクして、ね」

と答えながら、セリオは身体の向きを少し変える。

「セリオおねーさん…」

心配そうに見守るマルチに向かってセリオは、

「あ、そうそう。もしかしたら、あなたにも影響が出るかも知れないから、念のために、わたしと電位を等価させておいた方がいいわね」

と言って、おもむろに手首の部分を開き、そこから一本のケーブルを引き出して、続けた。

「これをあなたの充電用端子に繋いでちょうだい」

「は、はい」

マルチも戸惑いながらもその指示に従う。そんな様子を傍らで眺めながら浩之は、これはもしかして大変なことを言ってしまったのか…と早くも後悔の念にとらわれていた。

「さて、いくわよ。…あ、浩之さん、なるべく近場にある電化製品は電源切っておいた方がいいわよ」

「へ？」

“パチツ”

居間のテレビから凄まじい音がしたのは、浩之が聞き返すのと同時だった。

そして、それまでテレビ画面に写っていたナイター中継の画面が消え、そこには砂嵐の風景が広がった。

“ザー…”

「お、おい…何がどうなってるんだよ、セリオ…」

見ても面白くない画面から、浩之が二人の方に視線を移してみるが、セリオは答えない。そればかりか、セリオもマルチもびくりとも動かない。

「ど、どーなってるんだよ……」

二人の様子を間近で見ようと、浩之が近づいても、様子に変わりはない。

「おいおい……」

テレビは相変わらず砂嵐のまま。

セリオとマルチはびくりともしないまま。

このままでは罫があかないので、とにかく浩之は二人の意識を戻そうと試みた。

「…答えないと、胸触るぞ」

だが、相変わらず「反応はない」。

「…しよーがねーな。ホレっと」

反応がないのでしようがなく…いや、嬉々としてセリオの胸に手を伸ばす浩之。何故ここでセリオなのかと言うとそれは至って簡単な理由で、「マルチのは触ったことがあるから」だ。

「ふーむ…これはなかなか…」

とセリオの胸を触りながら、一人悦にいる浩之。見ようによっては、かなりあぶない状態ではあるが、この際それは関係ない。大事なのは、セリオの胸の触り心地であって、他人がどう思うかではないのだ。

さて、そのセリオの胸なのだが、見た目以上のボリュームと弾力を持っており、マルチ同様に職人のこだわりを感じさせる逸品だと言えよう。おまけに何だか浩之が触ってる部分が熱くなっているようだ。

「この感触といい弾力といい…まさに職人の心意気を感じるぜ」

と独り言のように批評を下していると、不意にテレビから歓声が響いた。

「ふむふむ、これはまさに歓声を受けべき逸品…って、違うぞ」

浩之がゆっくりと二人の方を見ると、

「浩之さん…何やってるんですか？」

きょんとした表情で尋ねるマルチ。そして、少し視線を上にはずらすと、

「浩之さんもやっぱり男なのねえ」

と何もかも理解したような表情で浩之を見詰めるセリオ。

「いや！ これは違うんだってば！」

慌ててセリオの胸から手を離して取り繕う浩之に対して、セリオは「あら、無理しなくてもいつでも相手するから、溜まったら言っただけだよ」

と、軽くウインクで返す。

「豪気だな、セリオは……」

「あら、だって、滅るもんじゃないし、それもわたしの目的の一つですからね」

「目的って何ですか？」

「子どもにはナ・イ・シヨ」

「はい、分かりました、セリオおねーさん」

何のことかさっぱり分からないまま、セリオの言葉に素直に従ってしまうマルチだったが、それはそれで賢明と言えるだろう。二人のやり取りを見て、浩之は心の底から思うのだった。

「それで、結果は？」

気を取り直して浩之が尋ねると、セリオは少し困った風な顔をして答える。

「それがねえ、キャッシュにもそれに該当する項目がなかったから、かなり検索にも時間を取りそうなのよ。そのせいで、しばらく待ちに入ってたから、浩之さんに胸を揉まれちゃうし」

「うぐう、それを言うなって」

「だからしばらく待っててね。そのうち結果が送られてくるはずだから」

「あ、そうだ。さっきテレビが変になったけど、何か関係あるのか？」

「ええ、衛星に送信する時にどうしても周辺に大きなノイズが出るらしいのよ。

市販されているタイプはそれが若干押さえられてるんだけど、やっぱりわたし単体での送信は不向きなのよね。バッテリーにも負担かかるし…。あ、来たみたいよ」

と言われて、思わず「どれどれ」と言いたくなった浩之だが、これ以上の醜態をさらすのをかろうじて止め、セリオの言葉を待った。

「どうなんですか、セリオおねーさん」

マルチが不安そうな表情で尋ねる。が、よく考えてみれば、もともとそんな大袈裟なことではないのだ。単に「残ってる材料だけでどれだけ豪華な夕食が出来るか」と言うだけで、その答えが何であれ、そんなに不安がる要素はない。

「なあ、マルチ。別に不安がる必要はねーんじゃないか？」

と浩之が言うと、

「そう言えばそうですね」

と微笑みながら答えた。この素直さはマルチの魅力なのだ。浩之は思わずマルチと二人きりの世界に入ろうとしたが、それをセリオの声が引き戻す。

「ふう…。該当項目ゼロ、ね」

ため息混じりの返事。心なしか表情にも落ち込みの色があった。だが、浩之はそんなセリオについとどめを与えてしまう。

「な、なんだ。結局何もないのか…」

そう言った瞬間のセリオの表情には変化は見られなかった。だが、明らかに何かが変わったのだ。

「…参考情報数件あり」

低くつぶやくようにそれだけ言った後、セリオはおもむろに流し台に向かって行った。

「お、おい、セリオ？」

浩之が声を掛けると、にっこりと微笑みながらセリオは、

「これからすぐに作りますから、浩之さんはマルチと一緒に遊んでくださいな」

とやけに丁寧な口調で答えると、すぐにくるつと向きを変えて、台所仕事に掛かり始めた。

「わたしも手伝います」

マルチがそう言っても、またもやにっこりと微笑んで、

「いえ、マルチは浩之さんのお相手をしてあげてちょうだいね」

と答えるだけだった。

「おい、セリオ…」

それ以上は浩之が呼べども答えずに、ただ一心不乱に料理を作っているようだ。しょうがないので、居間にも落ち着かないと感じた浩之は、マルチを連れて、二階の自室へと引きこもるのだった。

セリオからのお声が掛かったのは、浩之たちが部屋に上がってからゆうに二時間は経過してからだった。何が出来るかさっぱり見当がつかなかったものの、せっかくセリオが支度してくれてるのだからと、浩之は何も食べずに待っていい

た。それだけに、空腹と言うだけでどんな物でもご馳走になりそうな気がする。

「セリオおねーさんは何を作ってくれたんでしょうか」

どことなくマルチも嬉しそうである。

とにかくあれだけ時間が掛かったのだから、さぞかし凄い物が出来てるに違いない。腹の代わりに期待に胸を膨らませていた浩之が、食卓の上を見た時。

「え？」

浩之の口から出たのは、そんな言葉だった。

「何かご不満でも？」

と浩之の驚きようにも動ぜずに、セリオが聞いてきた。

「い、いや……。不満とかなんて……」

思わず言葉に詰まるが、それも無理はない。さんざん待たされた挙げ句の食卓の上には、極めて普通のご飯と、これまた極めて普通の味噌汁だけだったからだ。

「あれ？ ご飯とお味噌汁だけですか？」

恐らくは浩之が一番言いたかったことを、マルチがさらっと口にした。だが、それに対するセリオの答えは極めてあっさりとしたものだった。

「とにかく食べてご覧なさいよ、浩之さん」

「うっ……」

そう言われてなおも文句を言ってる場合じゃない。ただでさえ、腹は減ってるのだし、それがただのご飯と味噌汁だろうが、セリオが作ってくれた夕食には違いないのだから。

「わ、分かったよ……。それじゃ、いただきます……」

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

浩之が食卓について箸を取ると、セリオがにつこりと答える。

「はい、どうぞ」

そして、まずは…ご飯を取ろうとした時。

「違うわ。まずは右側にある汁物から先にいただくのが正しい作法なのよ」

と、セリオの声が響く。

(家で作法も何も関係ないじゃないかあ…)

心の中でそう反論しながら、浩之はしずしずとそれに従って、右にある味噌汁の方からいただくことにした。

ちよつと箸をつけて、まずは一口飲んでみる。

「う……」

お椀を持ったままの状態で、暫し動きが止まる浩之。

「浩之さん、どうなんですか？」

と心配そうなマルチ。

「どお？」

にやりと笑うセリオ。

なかなか対照的な二人だったが、すぐに一つの方向へまとまって行く。

「うまいっ！ このさっぱりとした中にあるコクと言い、うまみと言い、これは味噌汁の中の味噌汁だあ！」

「よかったです」

「当然でしょ？ この台所にあつた鯉節がねえ、ちよつと違ったの。これは一本一本手作

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

りのとても風味のある鰹節なのよ」

台所のことなどは、浩之よりもあかりの方が詳しいくらいだ。従って、浩之はそこに鰹節があったことなど知るはずもない。まして、それがこんなにおいしい味噌汁を作るものになろうとも。

「鰹節？ はて、そんなのあったのか？ まあ、それはともかく。味噌汁はダシのおかげとしても、ご飯はいつもと変わらねーもんな」

とやや挑戦的な言葉とともに、ご飯の方に箸を移す。だが、相変わらずセリオは不敵な笑みを浮かべたままだ。

「どれどれ……」

ご飯を取って、一口。そして咀嚼そじくした後。

「うう……。これは一体……何でこんなにうまいんだあ！ 普段食ってる米と同じなんだろう？」

「ええ、お米は変わらないわ。でもね、それは米粒の大きさが皆同じだから、炊き具合がかなり違うのよ。それにお釜もちよっと手を加えて、炊き具合に応じてわたしが直接制御したのよ」

「な、何と！ 粒が同じって、どうやって？」

「それはもちろん一粒一粒大きさを測ってたの。人がやったら、軽く数時間はかかるでしょうね」

「そ、そんなことまで……」

「つまり、そのご飯には、このわたしの心がこもってるのよ！」

「セリオおねーさん、感動しました〜」

「ううううう、セリオおお、ありがとお！」

いつの間にやら、食卓は異様な雰囲気支配されていることに、浩之もマルチも、そしてセリオですら気づかなかった。あるいは、気づいても敢えてそれを壊すことが出来なかつただけなのかも知れないが……。

#### 5. バッテリー・アラーム

極めて質素ながら満足出来る夕食の後、二人のメイドロボはそれぞれに仕事を分担していた。

マルチはお風呂の準備を、セリオは夕食の片付けを。そして、その頃浩之はHM研究所に電話をしていた。正確には、HM研究所に勤める山本と言う技術者に電話していたのだが。

「パパさん、どーゆーことなんすか？」

浩之の言うパパさんとは山本のことで、これは「マルチのパパさん」と言うのが正しい。山本とはマルチのことで付き合っても深く、マルチの育て親と言う意味と親しみを込めて、いつからか「パパさん」と呼ぶようになったのだ。

もっとも、「パパさん」こと山本の方は相変わらずだ。

『申しわけないですつ。ちょっととした手違いで、連絡より先にそっちに行つたみたいで…驚いたでしょう？』

「驚いたなんてもんじゃないですよ。だって、セリオの性格もあだし…」

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

あからさまに不平を漏らすと、山本が控えめに反論する。

『…あれは元々なんですよ、実は』

「え!? だって、昔はそんな素振りは…」

『昔からあの子も感情そのものはあつたんですよ。ただ、表現できないだけです。それで、その時の性格設定を見ると“明るなおねーさん”と……』

「……マジですか?」

『……マジです』

わずかな沈黙の後に短い返事。それは、紛れもなく事実であると言うことを一層強く肯定するだけではない。

『ところで、藤田さんのところの電源は普通の百ボルトの物ですよね?』

「は、はあ…。確か五十アンペア契約だと思うけど…」

『…足りないかも知れませんが。それにセリオの付帯機器は百ボルト仕様じゃないんですよ』

「え?」

『明日にでも工事の手配をしますが、セリオ用に新たに二百ボルト单相三線式の契約を電力会社と交わします。もちろんこの契約と使用料はすべてこちらで負担しますので』

「え? え?」

『それでは、よろしく願います。あ、そうだ。セリオには極力衛星への送信をさせないでください。今は充電が出来ないのです、無駄な使用は避けていただきたいので…』

「え? 送信って、もうやってたけど?」

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

『そりゃ、まずいですね。もしかすると、バッテリー警告が出て、非常停止する恐れもありますよ』

「そんなにきついんですか？」

『フル充電で送信さえしなければ二日。やや激しい動きをしても一日は動けます。でも、送信はフル充電でも連続十五分が限界です。もしセリオが停止したら、とりあえず専用のラックに寝かせておいてください。メモリや最低限の本体維持は予備電源でどうにかなるでしょうから』

フル充電で二日と言うのは、かなりの大容量である。マルチとは雲泥の差と言えるほどだ。

「…分かりました」

と電話を切って、とりあえずセリオの様子を見に行こうとする浩之だが、その電話の中で一度も「セリオを返す」と言う話題にならなかったことに不審がる余裕はなかった。

もしかしたら止まってるかも知れない。この場合は、バッテリー・アラームと言う物で、最低限の機能維持だけに留めると言う意味の「止まる」だが、それでもどこか不安を禁じ得ない。

浩之が台所に入ると、セリオは相変わらずの状態だった。洗い物を終えて、台所の整理をしているらしい。その手順や身のこなしはさすがにメイドロボとうならせるほどだ。

これなら大丈夫かな…と思ったものの、念のためにセリオ自身を確認することにした。

「なあ、セリオ。お前送信なんかして、バッテリーは大丈夫なのか？ 今のところ家じゃあ充電できないらしいからな…」

と浩之が心配そうな表情で尋ねると、セリオはそれまでやっていた仕事を止めて、

「あら、心配してくれるなんて嬉しいわ、浩之さん。でも、まだ大丈夫よ」

と屈託のない様子で答えてくれた。浩之にはそれが強がりなのか、本音なのかちょっと判断できなかった。

「本当に大丈夫なのか？ パパさんの話だと、セリオは十五分しか送信できないって言うしぎ…」

「大丈夫よお。それとも、今ここで停止したら、浩之さんが介抱してくれるのかしら？  
それだったらバッテリー・アラーム出してもいいかもね」

浩之はセリオの様子から見て、これは間違いないと判断した。それにしても、昼間の一件と言い、今と言い、どうもセリオは自分を誘惑するような気がしてならない…。そう思った途端、わずかにめまいを感じて、その場から逃げようように去って行った。

「……ちよつとマルチの様子を見てくるよ」

それだけ言い残して台所から浩之が去った後、セリオはまた整理の続きを始めた。

「そう言えば、あの子のバッテリーは大丈夫かしら？ さっきはあの子の電源と繋いじゃったから、もしかしたらかなり減ってるかも知れないわね」

その言葉は浩之の耳には届かない。だが、しばらくして、浩之が慌てた様子で台所に戻って来た。そして、それを見てセリオはまたつぶやく。

「やっぱり、駄目だったのね」

セリオの言ったことの意味も分からず、あるいはそんなことに気を回す余裕もないのか、

浩之はひどく慌てながら告げる。

「マルチが！ マルチが風呂場で寝てる…じゃなくて、止まっちゃまってんだ。別に身体が熱いわけじゃねーし…一体どうしたってんだ！」

「慌てないで、浩之さん」

浩之をなだめながら、セリオも一緒に風呂場に行ってみると、そこには湯船のへりに突っ伏して寝てるマルチの姿があった。

「一体どうしたんだろ？」

心配そうにセリオに聞く浩之と、マルチの身体に触れて様子を確かめるセリオ。

「やっぱりね」

すぐにセリオは結論を出したらしく、それに浩之が食らいつく。

「な、何がやっぱりなんだよ？ お前何かしたのか？」

「とにかく、今はこの子の充電が先ね。浩之さんこの子の充電の用意をしてくださいませんか？」

「充電？ 何でだ？ まだこんな風になるほど時間はたっちゃあいねーぞ？」

怪訝そうに聞き返す浩之に、セリオはくどい説明をするのを避けて短く言う。

「とにかく今はバッテリー・アラームで停止してる状態なんだから、充電の準備をしていただけませんか？」

丁寧ではあるものの強い口調で言うセリオに対し、うだうだと文句を言い続けることは浩之には出来なかった。

「う……分かったよ」

「この子はわたしが運んで行くから、浩之さんは先に行って」

セリオに気圧された：ような気がしなくてもないが、そんなことにこだわると、マルチの充電の方が最優先だ。浩之も腹を括って、風呂場から駆け足で出て行った。

「さて、と。まずはこの子を持ち上げて……つと。ちゃんと拭いておかないと

いけないわね……」

湯船に半身を落とし込む形で停止してるマルチを引き起こして、充電の際に露出する部分の周囲を念入りに拭く。ちなみに、セリオの筋力は十代女性なみと言うことになってるが、それはあくまでも標準状態の話で、筐体の強度や動力性能からすると、そこいらの男性にも負けないほどの筋力がある。普段はそれがセーブされてるに過ぎないのだ。

「それじゃあ、運びますか」

マルチが自分で動くような状態ではないので、ここはマルチを抱き上げるしかない。いくらマルチが小柄で軽いとは言っても、それを抱き上げられる女の子はそうはいないだろう。

「……ちよつと負荷かかるけど、まだもつわよね。それにいざとなったら、わたしもバッテリー・アラームかな。それじゃ、行くわよ！」

高出力状態や送信時の負担と言うのは、それらの負荷となる動力や送信機自体がかなり消費するのもそうだが、それよりも冷却器の能力が通常よりも要求されるためである。特に送信機の電力素子の冷却は必要不可欠で、これをしないことには十分な送信出力が得られないばかりか、送信機そのものの破壊も有り得るのだ。実は浩之が胸を触った時に「熱い」と感じたのもその放熱のせいである。

セリオがマルチを抱き上げて、そのままゆっくりとマルチの制御端末が置かれている部屋まで運び込むと、ちょうど浩之が準備を終えたところだった。

「ちよūdいいいタイミングだな。用意が今できたところだよ」

セリオは浩之に促されるようにそつとマルチを降ろして、すぐに手首を開いて、コードを繋げて行く。

「さすがに手慣れている感じだな、セリオは。俺と違ってマルチのことも詳しいしなかなか頼りになるね、やっぱりおねーさんて感じかな？」

浩之の誉め言葉に対して、セリオは制御用のPCのキーボードを素早く叩きながら手短かに答える。

「ありがと、浩之さん。さてと、これでいいわね。それじゃあ充電開始つと」

PCの画面には「充電中 完了まで約四時間」と表示されている。それを見たセリオがつぶやいた。

「…この子がこうなったのも、実はわたしのせいなのよ」

「な？」

「夕食前に送信した時にね、この子にノイズの影響が出ないようにと、電源ラインを繋いだんだけど、それが災いしたのよね」

「…マルチのバッテリーも使ってしまったとか？」

「そう。わたしとこの子じゃバッテリーの容量が違いすぎてね。わたしはまだ平気だけど、この子にはかなりの過負荷だったのね…」

そう言いながらマルチを見つめるセリオの瞳にはどこか寂しげなものがあった。

ふと浩之は考えてしまう。

準人間型として作られて、機能や能力のすべてが人間並みのマルチ。

高機能型として作られて、かなりメカ的な部分を持ちつつ、マルチのような感情も表現できる今のセリオ。

どちらが優れているのだろうか、と。性能から言えば、間違いなくセリオの勝ちだが、マルチはメイドロボと言うよりもただの女の子。その点ではセリオがメイドロボとして完璧な分だけ、マルチの優勢勝ちと言ったところになる。

だが、セリオもある意味ただの女の子に過ぎない部分があるのだ。それは浩之もおぼろげには感じている。

「セリオ……」

何気なくセリオの名前を口にする浩之。

すると、セリオはくすつと笑いながら、答える。

「さて、マルチはおねえねしたことだし……これからはオトナの時間ね？」

「え……」

一瞬だけ浩之の背筋を通り抜ける寒気。それは気のせいではなかったらう。

「胸を触るだけ触っておいて、それですませる訳には……行かないわよね？」

「おい、セリオ……」

「今夜はとことん付き合ってもらいますからね」

……。

その夜、浩之とセリオが何をして過ごしたか……。充電中で動けないマルチには知るすべ

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

もない。

ただ、セリオのバッテリーが余裕で朝までもつことだけは紛れもない事実だった……。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』第二話

初版:1997/06/21

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/06

PDF書式変更:2016/05/07